

もくじ 「型」を使った菓子づくり 1P 昭和レトロ家電展開催中 2P
 特別展「美と知性の宝庫 足立」開催に向けて 3P 『西蛮画獣譜』について 3P



菓子の型 祝い事に用いられることが多いため、目出度い形が多い 千住宿 喜田屋寄贈蔵)

足立史談

第575号

2016年1月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(27-308)

「型」をつかった菓子づくり



羽子板型の落雁の型
 右がガスつき・左がブッコヌキ
 アヤベ製菓寄贈

特別展「スイートランド あだち」では、昭和二〇〜四〇年代の機械化が一般的になる少し前の時代のお菓子づくりの道具を紹介しました。機械化以前は、町の中で製造販売する和菓子店も、問屋などを通して流通する袋菓子店の製造工場も、使う道具

に大きな違いはなく、原料の種類や加工の手段が異なるだけといえます。

落雁などを作るお菓子の型について詳しく紹介します。

材料を詰めて型から抜いて作るお菓子を、打菓子、あるいは押菓子といいますが。打菓子の材料は、味甚粉（みじんこ・もち米を蒸してついて焼いて、粉にし

たもの）や、焼麦粉、焼でんぷん粉などの穀類の粉で、砂糖、水飴を加えてまぜたものをつめて成型します。型から抜くときに、型を打って（叩いて）抜き取るころから来た名前でしょう。

落雁は、蒸して乾燥させると出来上がります。押菓子は、打菓子の材料に餡などを添えて、型に押しつけて成型したもので、打菓子より水分の多いものです。

菓子の製造に携わるところでは、菓子の木型を多数保有し、行事や季節に合わせた菓子を作っていました。

昭和三〇年代には都内に百社もあつたというおこし製造の会社では、湿気が多い夏場はおこしの製造には適さないため、多くは落雁を製造していました。こうした会社も金



ゲンペラ 製菓用具として
現在も販売されています

型や機械を使って製造する以前は、木型を使用していました。

木型にも種類があり、キヨスミ製菓（梅島）の加藤進氏によび方を教えていただきました。

○**割り型** 二つに分かれる型。形が比較的大きなもので、立体的に作る事ができる。

○**ゲスつき** 形が薄く彫つてある上に一枚型を重ねることによって厚みを出す。上の型を外して菓子を出す。

○**ブッコヌキ** 「数物」といって、数多く作るための型で、小さな形のものを作ることになる。型から直接菓子を出す。

打菓子をつくるときには、ゲンペラと呼ばれる木製のヘラ状のものを使用します。材料を型に手で詰めると、ゲンペラで擦り切ったり、型をポンポンと叩いて、菓子を出した

りするのに使います。ブッコヌキの型の場合は、とくに、ゲンペラで型を叩くことによって、菓子を型から抜き出します。

テンポよく作業をするので、ゲンペラで叩く音と叩き方のクセによって、作業をしている職人が誰だかわかるといいます。

この音が響くため、後藤製菓（東六月町）の後藤宗吉氏は、独立したばかりで千住の町中の家を借りて仕事をしていたときに、夜中の作業は近所迷惑になるので、忙しくてもあまり夜遅くには作れなかったといいます。

菓子の型は、浮世絵の版木と同様に、湿気に強く緻密で硬い桜の木を使用します。流通用の落雁用の型では、朴の木も使用し、これは値段も安くなるということです。

落雁の場合は、彫つた柄の部分に粉が詰まるため、型は濡らさず上側に少し油をつけて使用します。

金花糖という砂糖液を流し込んで形をつくるお菓子の型は、水に浸してから使い、さらに百度以上もの高温になった砂糖液が入るため、狂いが生じやすい難しい型で、型屋が一年もかけて少しずつ調整しながら完成させていくものだといいます。

砂糖液が型の隅々までしっかり入るように空気抜きを細い溝が彫られているのが特徴です。

彫刻の細やかさはもちろん、菓子のつくり安さや、使用する材料の量などまで考えられた木型づくりには高い技術が必要です。

現在は大型の打菓子や押菓子の需要は減少し、木型を使った菓子が作られなくなり職人も少なくなりました。使われなくなった古い木型は、美術的な装飾品として販売されているようです。

大阪くらしの今昔館で「昭和レトロ家電」展開催中

増田健一氏（大阪市立住まいのミュージアム特別研究員）のコレクションが、本拠地、大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）で今年も開催です。

生活シーンに合わせたなつかしの家電、選りすぐりのポスターなど魅力ある資料が満載です。大阪まで足を延ばしてぜひご覧下さい。

当館で平成二四（二〇一二年）年、区制八〇周年記念に開催したときには大人気を博しました。

本年、当館は開館三〇周年を迎えます。記念特別展として、ふたたびの開催を計画中です。お楽しみに！

セルドイロ人形も型を使って作られており、とくに金花糖づくりの型と似ているところがあります。隅々までセルロイド生地が膨らむように、空気抜きが作られているのです。食品でも、工業用品であっても、さまざまな立体物が作られるときは型が必要でその基本は似通ったところがあるというのは面白いところで

（学芸員 荻原ちとせ）

お正月だよ！今年もよろしく
昭和レトロ家電
～マスココレクション展～
平成28年1月3日(日)～2月14日(日)
大阪くらしの今昔館
TEL: 06-6624-2111
FAX: 06-6624-2112
HP: www.koyamagaku.com

特別展「美と知性の宝庫 足立」 開催に向けて

郷土博物館では、文化遺産調査として区内の美術資料を中心に、関連する歴史・民俗などの総合的な調査を進めています。

その成果を公開する特別展を三月十三日から開催するのに先立ち、十二月七日、区長記者会見を開きました。今回は初めて各新聞社の美術担当記者にもお知らせし、展示開催までに、まだ二ヶ月以上ありますが、大きな美術展覧会と同様に事前周知に努めました。

さっそく、東京新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞などで取り上げられ、テレビでも、J-COM、そしてNHK「おはよう日本」で放映されたため、ご覧になられた方も多かったのではないのでしょうか。

足立はこれまでも、昨年二百周年を迎えた千住の酒合戦、甲良屋敷での李花宴（『東都嘉慶花宴集稿』）など、文人墨客が文雅な催しを行い、多くの文化資料を創作してきたことが知られており、関連資料は区の文化財にも登録されています。

文化遺産調査の進展によって、個別的な文化財の背景には、豊かな教養や美を日常的に愉しむ人々の生活があり、これまで注目されていた千住

地域のみならず、区内の広い範囲で文化芸術活動が活発であり、それぞれがつながりをもっていったということがわかってきました。同時代に絵師たちとの関わりのおかげで創られ、そのまま伝来したものが多くということが、足立の特徴です。

江戸近郊という地の利は、江戸で活躍する絵師たちとの日常的な交流を可能にし、区内に伝わる資料の生まれた背景もうかがえます。美術史研究にとってもこれまで知られていなかった資料が発掘され、大きな期待が寄せられています。

足立は、美と知性の宝庫なのです。



記者会見で示された初出資料の画像「歌仙図」鈴木其一画の摺物（右）武蔵野美術大学玉蟲教授を中心とした資料研究の様子

特別展「美と知性の宝庫 足立」 『西蛮画獣譜』について

小林 優

文化遺産調査では、江戸後期から少なくとも戦前にかけて、足立の地で豊かな文芸文化が展開され続けてきたことが明らかになっていきます。特別展では、その第一弾として、江戸琳派の絵師たちや関東画壇の重鎮・谷文晁らとの交流と、その中で花開いた足立の文人文化に焦点を当てます。

記者会見でも画像を配布したため、新聞等でも取り上げられた展示の目玉の一つと言える『西蛮画獣譜』（せいばんがじゅうふ）を展覧会に先立って詳しくその見どころをご紹介します。



『西蛮画獣譜写』より「ライオン図」（船津家蔵）

介します。

■船津家に伝来した写山楼資料

今回の展示の中核をなすのが、沼田村（現・江北）の名主で、谷文晁（二七六三―一八四一）に入門して絵を学び、絵師としても活動した船津文淵（久五郎、一八〇五―五六）の家に伝来した資料の数々です。その中には文淵自身の活動を示す資料に加え、二〇〇点を超える文晁の工房兼画塾「写山楼（しゃざんろう）」ゆかりの粉本が確認できます。

粉本（ふんぼん）とは、広義に絵師の修練の材料となる絵手本、自身の制作の参考とするための模本、そして制作の草稿や下描き段階の稿本といった、本画制作の前段階に位置するものを総称した呼称として現在用いられます。それはそのまま、どのような絵を参考とし、どのような表現を目指していたのかという絵師の指針・学習を示すものであり、絵師あるいは一つの門派を追究する上で、極めて重要な資料となります。

寛政の改革を断行した松平定信お抱えの絵師として、定信の主導する古文化遺産の調査にも当たった文晁は、その過程で制作した模写に加え、数多くの粉本資料を残したことで知られており、文晁に学んだ写山楼一門の手による模本も含めて、現在全国で、約一七〇〇点が確認されています。

船津家資料中の写山楼粉本は、これに続くものであり、その中でもポーランド出身の医者でもある学者、ヤン・ヨンストンが著わし、一七世紀に日本にもたらされた博物書『動物図譜』を模写した二冊の『西蛮画図譜』は、文晁・写山楼における洋風表現学習の一端を明示する出色の newly 資料なのです。

■『西蛮画図譜』の基本情報

船津家伝来の写山楼資料には『西蛮画図譜』と『西蛮画獣譜写』という二種の『動物図譜』模写が確認できます。制作年代は不詳ですが、それぞれに表題と「畫學齊蔵弁」（ががくさいぞうきよ）と記された題箋が表紙に貼られており、『西蛮画獣譜』は九頁に牛、らくだ、グリフィンなど約二〇種の動物が、『西蛮画図譜』より一回り大きい『西蛮画獣譜写』には一二頁の中にライオン、キリン、象、ユニコーンなど約五〇種の動物の姿が描かれています。

両資料の間には、重複する同一の動物図像が確認でき、『西蛮画獣譜』と『西蛮画獣譜写』が必ずしも連続性をもって制作されたわけではないことを伺えますが、いずれも『動物図譜』の銅版による繊細精緻な挿絵を、極細の墨筆によって細密丁寧に写し取っており、模者の高度な技術を示しています。

また、文晁・写山楼一門による『動

物図譜』図像の模写例は、文晁らによるものと思われる縮画帖(個人蔵)の中に描かれたイッカクとサイの図が他に確認されており、本資料との関連が考慮されます。

■元図としてのヤン・ヨンストン『動物図譜』

『西蛮画獣譜』の元図『動物図譜』は、原題を「J. Jonstons

Natuur der Vier-voetige Dieren

』と言い、ラテン語の原書をオランダ語訳して、一六六〇年にアムステルダムで刊行されました。

海中生物、鳥類、四足動物、昆虫のほかユニコーンなどの空想動物までを分野別に網羅しており、銅版画家メリアン親子による精緻な銅版挿絵と相まって、当時のヨーロッパ社会で広く愛好されました。

この『動物図譜』は寛文三二(一六九二)年、四代將軍家綱への献上品の一つとしてオランダ人ヘンドリック・インディック(Hendrick Indijck)によって日本にもたらされ、將軍家の書庫である楓山文庫に収められました。また、明和五(一七六八)年、本草学者・平賀源内が家財を売り払ってオランダ商館長から同じ書物を手に入れたことが、源内と親交の深い絵師・司馬紅漢(しばこうかん)によって記録されています。

こうして日本に少なくとも二冊伝

来した『動物図譜』は、宗紫石(そうしせき)や司馬紅漢、石川大浪(いしかわたいろう)といった、従来の日本画的表現を脱して、リアリズムを伴った「洋風表現」の導入と研鑽に邁進していた絵師たちの格好の教材となり、文晁が絵師としての活動を本格化させる安永(一七七二〜八〇)の頃には、西洋表現の学習を志す絵師たちにとって、その存在と図像がある程度認知されていたものと考えられます。船津家伝来の二冊の『西蛮画獣譜』は、こういった『動物図譜』を介した江戸中後期の絵師たちによる洋風画研鑽の流れの位置づけることができるのです。

■『西蛮画獣譜』から見えてくるもの

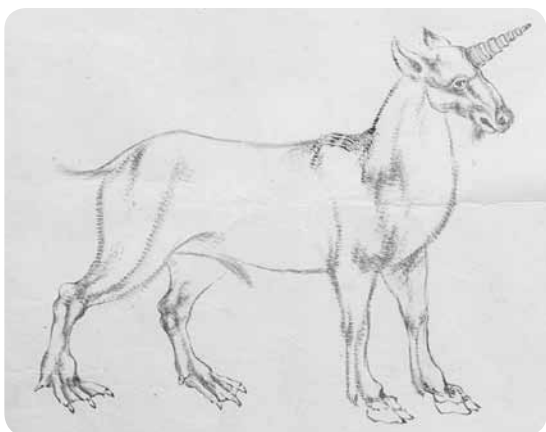
文晁の洋風表現の学習過程を示す資料として特に知られているのは、享和七(一七二二)年に八代將軍吉宗がオランダ商館長に発注し、江戸の五百羅漢寺に下賜したファン・ロイエンの油彩画を元図とする文晁の模写作品《ファン・ロイエン筆花鳥図模写》(制作年不詳、神戸市立博物館蔵)です。しかし、この《ファン・ロイエン筆花鳥図模写》は、ファン・ロイエンの原画そのものの写しではなく、江戸の洋風画家・石川大浪・孟高兄弟による模写を文晁がさらに模写したものである可能性が指摘されています。

第一模者である石川大浪は、幕府

大番役を務めた旗本であると共に、洋風画法に熟達した絵師でもあり、洋風画法を教授するなど、文晁と親しく交流したことが記録されています。そして、この大浪もまた、文晁が定信のお抱えとなる前の寛政元(二七八九)年に、『動物図譜』のライオンの図像を扇面に模写した《ライオン図》(二七八九年、府中市美術館寄託)を描いており、楓山文庫か源内所蔵、もしくはそれ以外の『動物図譜』を眼前に見ることができると状況にあったことが伺えるのです。

船津家伝来の『西蛮画獣譜』の制作背景には、もしかしたら文晁と大浪の交流が関わっていたのかもしれない。

(郷土博物館専門員)



『西蛮画獣譜』より「一角獣図」(船津家蔵)